

## 多くのきっかけをいただいた4年間

妹尾 哲志

筆者は1995年4月に国際関係学部に入學し1999年3月に卒業した8期生にあたります。現在国際政治などの授業を担当する大学教員の仕事をしていますが、国際関係学部で過ごした4年間の経験なしにはそうした道に進むことはあり得ませんでした。学部創設30周年記念特別号ということで今回お声がけいただき、国際関係学部で過ごした中で現在の自分に影響を与えたきっかけなどについて書かせていただければと思います。

国際関係学部に入學してまず驚いたのはいわゆる帰国生や留学経験などがある学生が多かったことです。一方筆者は当時パスポートすら持っておらず、周りのこうした学生達が英語で話したりしているのを見て、何とも場違いなところに来てしまったと愕然としました。ただこうした学生達と知り合うことができたのは刺激的であり、日本という国の外側でどんな世界が広がっているのかに目を向けさせてくれるものでした。このような刺激をきっかけとして、1回生のときに立命館大学などが中心となって開催された『世界大学生平和サミット』に参加しました。そこでもまた、留学生をはじめとした海外からの参加者らと交流する中で、国際関係への関心を深めていくことができたと思います。

ただそれまで英語で議論するといった機会など殆どなかったこともあり、やはり英語を少しでも話せるようになりたいと思うようにはなりました。そこで2回生になって「オーラル・プレゼンテーション」(当時)という授業に挑戦しました。この授業は、受講する学生のほとんどが帰国生や留学経験のある学生であり、授業自体も英語で進行されるなど厳しい授業で知られており、他の受講生が楽しそうに英語でコミュニケーションをとっている中で当時の筆者にはついていくのすら大変困難なものでした。後から考えれば外国語を勉強する上で多くの人が通る道だと思うのですが、当時はどのように授業の輪に切り込んでいけるのか真剣に悩みました。

そうこうしているうちに授業も後半に入ると、受講生が何か一つ映画を取り上げ、それについて英語でプレゼンテーションするという課題が出されました。他の受講生がフリートークも交えながら素晴らしいプレゼンテーションを行い、いよいよ自分の順番がまわってきたとき、友人の協力も得て用意した原稿を読み上げる形で何とかプレゼンテーションを終えることがで

きました。それは決して流ちょうな英語には程遠いものでしたが、その時に担当教員らから、伝えようとする意志や目的などが明確でわかりやすかったといった評価をいただきました。この授業を通じて、月並みかもしれませんが、もちろんコミュニケーションの一つの手段として外国語のスキルを磨くことはとても大切ですが、何を伝えようとするかという目的なども併せて重要であることを身をもって知ることができました。さらにその後友人達の後押しもあって、大学のプログラムである語学研修でアメリカに行き、1カ月ほどでしたが初めて海外生活を送りました。このような経験は、大学院に進んだ後にドイツに留学した際などにも何度も思い出し、その度に勇気づけられるものとして胸に刻み込まれています。

また2回生になってゼミナール形式の授業でE・H・カーの『危機の二十年』を講読する機会があったことが国際政治への関心をより強めてくれました。担当教員の丁寧な解説のおかげもあって楽しく授業に取り組むことができ、国家間関係における理想と現実の厳しさについてもっと勉強したいと考えるきっかけをいただきました。加えて別の授業では、冷戦時代のヨーロッパの国際政治において、大国の動向に左右されながらも積極的に分断克服に向けて取り組んだドイツ連邦共和国（西ドイツ）に興味を持ったことも、現在専門とする研究テーマにつながっていると思います。さらには、大学院の授業に参加させていただく制度（当時）を利用し、先輩達からも刺激を受けながら研究を進めていくことへのイメージを少しずつ持ち始めることができました。有志が集まった国際政治の勉強会にも参加し多くを学ぶことができたのもいい思い出です。

それ以外にも、オリターなどの活動を通じて得た友人達との交流など、紙幅の都合もあり全てを挙げることはできないのですが、国際関係学部で刺激を受け続けた日々こそが現在の自分の礎になっていると感じます。在学中にその後の人生に向けた刺激や何らかのきっかけを得ることができる環境を享受した一人として、こうした環境を整えてくださった教職員をはじめとした関係者の皆様と、刺激を与えてくれた全ての人にこの場を借りてあらためて深く感謝申し上げます。

（妹尾 哲志、専修大学法学部教授）